

纏向(まきむく)遺跡は邪馬台国か

高島忠平

1、邪馬台国論の位置づけ

弥生時代、つまり日本列島における初期農耕社会の成立は、列島社会が、事実上の統一国家となった7世紀後半の律令国家成立へむけて、急速に歩みを進める契機となった。このことは、弥生時代というものが、列島の古代国家の成立過程において、国家成立を志向した、政治的社会成立へ向けての初動がなされた段階というふうにも位置づけられよう。これは、弥生時代の文化や社会の変化・推移の文脈の中で、「国」または「クニ」の成立といった「地域的政治社会」の成立・成長・発展・拡大とその歴史的意義を捉えようとすることでもある。今日の邪馬台国論の多くは、3世紀といった短い歴史の一断面を切り取って、そこで立論される。邪馬台国は、邪馬台国の時代3世紀が、考古学的に弥生時代に属するのか、古墳時代に属するのかの議論はあるにしても、弥生時代の歴史的所産として出現してくるものであることは間違いない。「邪馬台国」や「卑弥呼」もそうした弥生時代の歴史的所産としての捉え方が不可欠である。そうした作業仮説を経ていない邪馬台国論は、空説の域を出ていないといえる。これからは、これまでの多くの邪馬台国論のこうした大きな弱点を補い新たな「邪馬台国論」が構築されねばならない。

2、最近の考古学と邪馬台国論

1999年、奈良県桜井市纏向遺跡にあるホケノ山古墳の発掘調査の結果が公表された。ホケノ山古墳は、「3世紀中頃」の築造で、「石囲い木郭」の中に削り抜き木棺を納めた特殊な構造をもつ前方後円墳であること、副葬品として面文帯神獣鏡・内行花文鏡片・銅鏃・鉄族・鉄製工具類などがあり、「定型化」した近畿の前方後円墳につながるものとして位置付けられた。さらに「ヤマト政権」あるいは「ヤマト朝廷」の前身・初現であると同時に、それは当然「近畿邪馬台国」という解釈が、従来の邪馬台国近畿説の立場をとる研究者の間で大きくなった。はては、被葬者は卑弥呼の父親か祖父、重臣説など、怪しげな想像まで湧出し、邪馬台国近畿説が決定的になった観のごとくであった。

また、最近では、奈良県桜井市勝山古墳の周濠の木製品に使用された木材のC14や年輪年代測定から、当該古墳の年代を3世紀はじめとして、「大和朝廷」・「大和政権」の成立を遡らせ、さらにその「政権」こそ邪馬台国にほかならないとし、纏向遺跡を邪馬台国の都とする「邪馬台国近畿説」が決定的になったという見解が示された。一方、弥生時代の近畿地方には、邪馬台国のような大きな政治勢力を輩出する考古学的知見が見出せにくいことから、キビ・ツクシなど他の地域の複数の勢力による「談合」でもって近畿地方(ヤマト)に邪馬台国(ヤマト政権)が成立したといった「現代社会の生々しい政治や業界の現

象」と対比するような説もでてきている。さらに、滋賀県伊勢遺跡の環状集落をして邪馬台国連合の集会場説さえ出てきた。卑弥呼の古墳すら特定できない「邪馬台国九州説」は、考古学的には影が薄くなりつつあるという観がある。しかし、ホケノ山古墳・勝山古墳にしる、あまつ箸墓古墳にしる、伴出の土器をはじめ遺物の考古学上の基礎的な問題整理の作業も行わずに、C14年代や年輪年代測定の結果を当該古墳や遺跡・遺構の歴史年代として短絡し、さらに、国家史としての位置付けや意義付けをしないままの大和政権・大和朝廷や邪馬台国に飛躍する宝探してきな「物本主義」に陥っているとわれてもしかたないところがある。

これに対して、最近の「邪馬台国九州説」の考古学的発見の立場からの反論は、弱いものがある。近畿説に対する批判はあるが、1989年の吉野ヶ里の登場以来、一部をのぞいて、考古学的な立場からの独自の「邪馬台国九州説」の新たな構築がみられない状況である。しかし、九州においては、当時の集落や地域社会の構造を明らかにしていく発掘調査が進む中で、邪馬台国九州説の立場をとる研究者が、確実に増殖しつつある。また、文献(史)学の立場からは、「邪馬台国九州説」に、有利に導く見解が多く出ている。

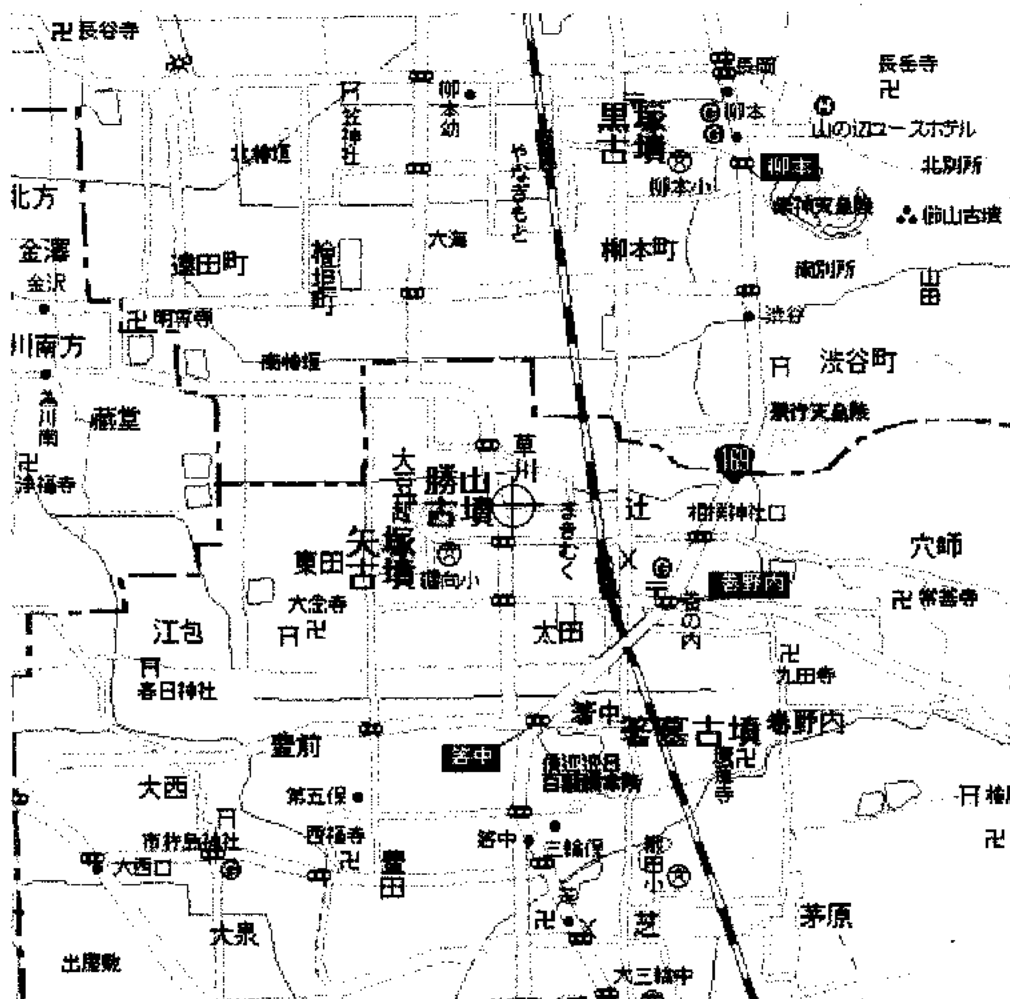
邪馬台国の所在地をめぐる論争は、日本列島の国家史をめぐるものであり、日本列島社会のグローバルな問題・課題であり、「想いの地域」で根拠となる資料が、必ず発見されるとは限らない。考古学的にも、特定の地域あるいは一つの邪馬台国候補地に、自説に有利な証拠を求める姿勢は、偏狭な立場で、「強い思い入れ」にすぎず客観性の要求される歴史学には適切ではなく、むしろ歴史を「捏造」する危険性がある。私は、黒塚古墳・ホケノ山古墳の発掘調査の成果は、邪馬台国九州説にとって、むしろ有利なものとなさえていく。十数年前の吉野ヶ里遺跡の巨大な環濠集落の発見や、数年前の奈良県黒塚古墳における多量の三角縁神獣鏡発見の時もそうであったように、これで、邪馬台国の所在地については決定的になったわけではない。私からすれば、吉野ヶ里遺跡は、邪馬台国時代や邪馬台国あるいは巫女王卑弥呼の出現の「歴史的過程」を明らかにする仮説を組み立てる有力な資料のひとつにすぎない。いずれにしても、吉野ヶ里遺跡の発見以来、邪馬台国論争は、具体的なイメージを求めて、広がりとともに深まりを見せていることは事実である。

3、近畿邪馬台国の都—纏向(まきむく)遺跡について—

1) 遺跡の概要

纏向遺跡(まきむくいせき)は、奈良県桜井市、御諸山(みもろやま)とも三室山(みむろやま)とも呼ばれる三輪山の北西麓一帯に広がる弥生時代末期～古墳時代前期の遺跡群を指す。遺跡範囲はJR 巻向駅を中心に東西約2キロメートル・南北約1.5キロメートルに及び、面積は300平方メートルに達する。古墳時代の始まりを告げる遺跡であり、今日、邪馬台国畿内説を立証する遺跡ではないかとして注目を浴びている。現在の名称で呼ばれるまでは、1930年代は太田遺跡として扱われていた。小規模な遺跡群の一つとして研究者には認識され、特に注目をあつめて

いなかった。しかし、1971年に行われた県営住宅、小学校建設の為に榎原考古学研究所がおこなった事前調査により、幅5m、深さ1メートル、総延長200メートル以上の運河状の構造物が発見された事により、注目を集めることになる。その後も、さまざまな出土品が広範囲にわたって確認された。1977年の第15次調査以降、調査主体が榎原考古学研究所から桜井市教育委員会へと移り、現在も調査を継続している。



・主な遺構 唐古・鍵遺跡の約10倍の規模をもち、都市計画のなされていた痕跡と考えられる遺構が随所で確認されている。矢板で護岸した幅5メートル、深さ1メートル、総延長200メートル以上にわたる巨大水路の発見。底からは湧水がみられ、内部は大きく分けて3層に分かれている。径約3メートル・深さ約1.5メートルの一方が突出する不整形な円の土抗が約150基発見された。掘立柱建物跡と、これに附随する建物跡。弧文板・土塁と柵列を伴ったV字形の区画溝 導水施設跡遺跡内に点在する古墳。(大和古墳群) 現在は確認できない埋没古墳が多数ある可能性あり。

主な遺物 朱色に塗った鶏形木製品吉備地方にルーツを持つとされる直線と曲線を組合わせて文様を施した弧文円板(こもねんばん)と呼ばれる木の埴輪。編製の巾着袋 瓦質土器(1996年に土器片の発見。胎土成分組成の分析により、2001年に国内で類例のない事が確認され、朝鮮半島内の技術で作られたものと判明した。)ミニチュアの舟 木製鏃 搬入土器 石見型楯形(いわみがたがたがた)木製品 日本全国でつくられたとみなされる遺物が出土しているが、なかでも東海地方の物が多い。木製品の年輪年代測定などから、纏向石塚古墳は、遅くとも225年頃までには築造されていたと考えられている。

2) 纏向遺跡の主な古墳

1. 柳本大塚 (古墳時代前期初頭)
前方後円墳、全長約94m、後円径54m、主室は墳丘中央部の南北主軸に沿う竪穴式石室、割舟状木棺、鏡埋納室。周濠は不明。築造時期は古墳時代前期前半。出土遺物銅鏃、鉄片、銅鏡(径39.7cm)。
2. 纏向勝山古墳 (古墳時代前期初頭)
前方後円墳、全長110m、後円径約60m、周濠巾約25m、埋葬部不明、葺石・埴輪無。出土物は主に周濠部より出土。木製の刀剣把手・団扇・槽など祭祀具、U字型木製品。
3. 纏向矢塚古墳 (古墳時代前期初頭)
前方後円墳、全長約96m、後円径約64m、周濠巾約17~23m、墳頭部に板石が露出しているので竪穴式石室または箱式石棺が考えられる。
4. 纏向石塚古墳 (古墳時代前期初頭、3世紀前半頃。日本最古の前方後円墳とされる)
前方後円墳、全長96m、前方部長約32m・巾約34m、くびれ部巾約12.8m、周濠巾約20m、葺石・埴輪無。埋葬部詳細不明だが、石材未確認なので木槨または木棺直葬と推定。周濠から弧紋円盤・鶏形木製品・鏃・鏃・横槌・水槽・建築部材等木製品が出土。弧紋円盤は、吉備地方にルーツをもつとされる、直線と曲線の組み合わせ紋様を持つ、木製の埴輪。
5. 東田大塚古墳 (古墳時代前期初頭)
前方後円墳、全長約96m、後円径約64m、周濠巾約21m、竪穴式石室かも不明、葺石・埴輪無。周濠外堤部に東海系壺片で蓋をした土器棺(中部瀬戸内系)埋納。
6. 箸墓古墳 (古墳時代前期初頭)
前方後円墳、全長約280m、後円径約160m、前方部前面巾約147m、後円部5段築成・前方部前面4段築成、周濠巾約10m、後円部に渡り堤を付設、葺石を施し、墳頂部に底部穿孔の二重口縁壺、後円部5段付近に特殊器台形埴輪・特殊壺・特殊円筒埴輪が出土。周濠部から木製の鏃・手斧の柄などが出土。
11. ホケノ山古墳 (古墳時代前期初頭、3世紀中頃?)
前方後円墳、全長80m、後円径約55m、後円部3段築成、周濠巾約10.5~17.5m、葺石を施す。前方部裾葺石の一部を取り除き、瀬戸内系の壺・東海系の壺を副葬した木棺を埋葬、主体部石積木槨(長さ約7m、巾約2.7m)・割抜式木棺(コウヤマキ製5m)、槨内から銅鏃60本以上・鉄鏃60本以上・素環頭太刀1口・鉄製刀剣類10口前後・加飾壺・画紋帯同向式神獸鏡、破碎鏡、鉄製農工具が出土。石囲い石積木槨は我が国初。

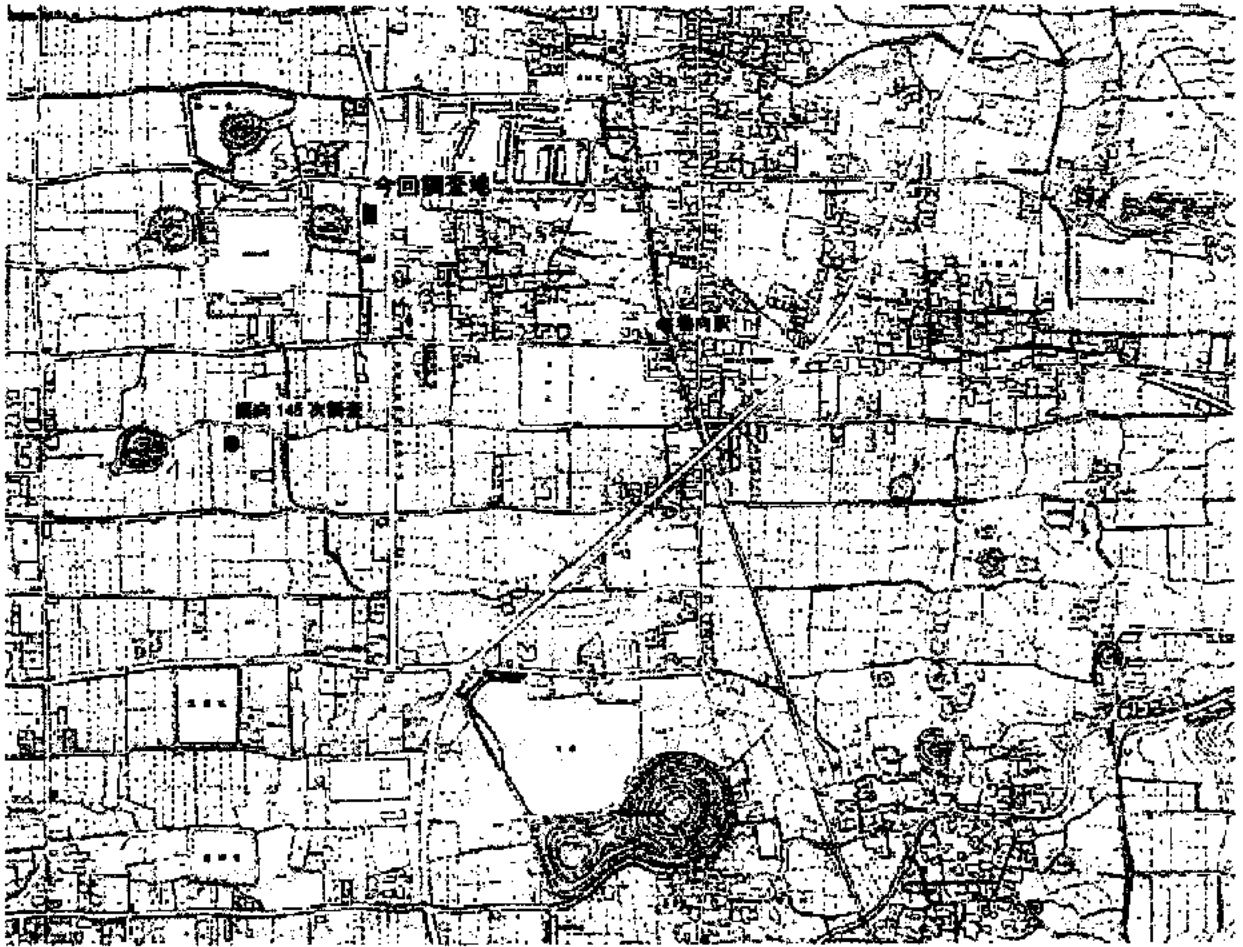


図1 調査位置図(1/10000)

1. 纏向石塚古墳
2. 纏向勝山古墳
3. 纏向矢塚古墳
4. 東田大塚古墳
5. 箸墓古墳
6. ホケノ山古墳

3)各地の土器の集中

搬入土器の出身地割合

関東系 : 5% ■
 東海系 : 49% ■■■■■

近江系	5% ■
北陸・山陰系	17% ■■
河内系	10%
紀伊系	1%
吉備系	7% ■
播磨系	3%
西部瀬戸内海系	3%

弥生時代末期から古墳時代前期にかけてであり、邪馬台国の時期と重なる。当時としては広大な面積をもつ最大級の集落跡であり、一種の都市遺跡である。出土土器全体の15%は、駿河・尾張・近江・北陸・山陰・吉備などで生産された搬入土器で占められ、製作地域は、南関東から九州北部までの広域に拡がっており、人々の交流センター的な役割を果たしていたことが窺える。このことは当時の王権(首長連合、邪馬台国連合)の本拠地が、この纏向地域にあったと考えられる。伝承では倭迹迹日百襲姫命の墓とされる箸墓古墳があり、これは、墳丘長280メートルに及ぶ巨大前方後円墳である。倭迹迹日百襲姫命はまた、邪馬台国の女王卑弥呼とする説がある(肥後和男『邪馬台国は大和である』秋田書店)。以上の点から邪馬台国畿内説の有力候補地と見なされている。

ヤマト政権発祥の地 『記紀』では、崇神天皇・垂仁天皇・景行天皇の磯城瑞籬(しきみずがき)宮、纏向珠城(まきむくたまき)宮、纏向日代(まきむくひしろ)宮が存在した伝えられ、さらに雄略の長谷(泊瀬)朝倉宮、欽明の師木(磯城)島大宮(金刺宮)なども存在した。『万葉集』にも纏向の地名がみられる歌が数多く詠まれている。

特異な遺跡 纏向遺跡は大集落といわれながらも、人の住む集落跡が発見されていない。現在発見されているのは、祭祀用と考えられる建物と土抗、そして、弧文円板や鶏形木製品などの祭祀用具、物流のためのヒノキの矢板で護岸された大・小溝(運河)などである。遺跡の性格としては居住域というよりも、頻繁に人々や物資が集まったり、箸墓古墳を中心とした三輪山などへの祭祀のための聖地と考える学者も多い。

4) 邪馬台国畿内説の最有力候補地

石野博信・寺沢薫の考え。(「纏向都市論」や、この遺跡の特徴から。)

- イ 遺跡規模がずば抜けて大きく、農耕集落でこれだけの面積を有する所は他にない。
- ロ 土器とともに人々が集まり、交流・交易が盛んだったこと。
- ハ 土木工事用の鋤の出土が多く、古墳や巨大水路の大規模土木工事が多かった。
- ニ 辻地区の、橋で囲まれた、正しく西面する妻入りの掘立柱建物と付随建物。
- ホ 石塚古墳をはじめとする発生期の古墳は、「纏向型前方後円墳」と呼ばれ、後円部が正円形ではなく楕円形をしていたり、後円部に対し前方部が非常に小さく低く、全長:後円

部系：前方部 の長さの比が3:2:1となるなど企画性の下に造られ、この企画が前方後円墳の定型とされ、各地へ普及していった。
これらのことから、当時の纏向が政治や文化の中心地であったと推定している。